

知的障害児の歌と動作を合わせた歌遊びに関する研究

小林 富之

I 問題

音楽は、生活の中に溢れており、性別や年齢、障害の有無にかかわらず、感じたり、表現したり、楽しんだりすることができるものである。

知的障害児にとっても音楽活動は、身体運動を促し、表現やコミュニケーションの手段となる(松井, 1980)。つまり音楽活動は、単に音楽活動そのものとしてだけの意味をもつのではなく、子どもの成長や発達においても、重要なルートだといえる(梅本, 1987)。

特別支援学校(知的障害)小学部における音楽の目標は、「表現及び鑑賞の活動を通して、音楽についての興味や関心をもち、その美しさを味わうようにする」と示されている(文部科学省, 2009)。また、教科書解説では、身体表現の重要性が指摘されており(文部科学省, 2011)、歌と動作を合わせた歌遊びが、朝の会や帰りの会、音楽などで行われている。

歌遊びには、指先の動きや身体の多くの部分を含んだ動きなど、様々な動きによる表現がある(角藤, 1985)。障害児においては、自発的行動の発現や他者とのコミュニケーションの形成、運動の調整などを促進させる(久保山・菅井, 1993)。また、歌遊びの要素である動き、歌、言葉が、発達初期における子どもの身体機能や認知機能を高めることも指摘されており(遠藤, 1998)、人間行動形成過程の初期学習上、極めて重要だと考えることができる(菅井, 1994)。しかし、実際の指導においては、教師自身がこれまでに培った実践の積み重ねや経験などによって行われることが多い。特に知的障害児における歌遊びを実践する上では、運動機能の障害(小宮, 1970; 南雲・松野, 1982)や動作を促す歌詞の種類(遠矢, 1997)、音楽を知覚し、運動調整をしながら音楽に合わせて動く上で重要となるリズムの構成(齋藤, 1996; 齋藤・星名・斉藤, 1989)など、歌遊びの要素に着目し

た音声や動作の表出を検討することが必要である。

II 目的

本研究では、知的障害児を対象に歌遊びの指導を行い、歌遊びを構成する動作及び歌詞の種類、リズムを中心とした分析から、音声と動作の表出の関連を明らかにし、児童の表出を促しやすい楽曲の選択や教師のかかわりについて検討することを目的とする。

III 方法

1 対象

1) 対象児

A 県立 B 特別支援学校(知的障害)小学部に在籍する1学年5名(男児2名、女児3名)と2学年2名(男児2名)の計7名であった(以下、C1~C7とする)。

2) 実施場面

小学部低学年の音楽の授業において実施した。音楽の授業は、火曜日と木曜日の3限(10:00~10:30)に行われた。

3) 歌遊びの指導の実施計画

期間はX年4~9月(夏季休業期間は除く)までの6カ月間、週2回、実施した。また、教室の前方2方向からビデオカメラを配置し、対象児の音声と動作及び教師のかかわりを記録した。

2 手続き

1) 歌遊びの選定

保育園や幼稚園においてよく用いられる楽曲や特別支援学校小学部知的障害者用音楽科教科書に掲載されている楽曲を中心に親しみやすく、わかりやすいと考えられる歌遊びを検討し、音楽担当者と協議の上、「山びごっこ」「こぶたぬきつねこ」「さかながはねて」の3曲を選定した。

2) 歌遊びの提示方法

主指導者(以下、MTとする)1名、副指導者(以下、STとする)5名の計6名で行った。MTは、児童の前方で音声と動作を提示した。STは、

児童の後方や側方でモデルや称賛、声かけ、身体支援などを行った。伴奏は、1学年の副担任で、音楽担当者でもあるSTが行った。

3) 分析方法

歌遊びを構成する動作及び歌詞の種類、リズムの構成に焦点を当てて、音声や動作を表出した割合を算出し、それぞれの関連を検討した。また、音楽の授業に参加している教師6名を対象に、教材や児童の反応に関する事後アンケートを実施した。

3 倫理的配慮

A県立B特別支援学校の学校長と学級担任及び対象児の保護者からの承諾と学内の研究倫理審査委員会の承認（承認番号：26-62）を得た。

IV 結果

1 楽曲における音声及び動作の表出

楽曲における動作の表出に顕著な違いはみられなかった。また、図1に示した「山びこごっこ」における歌詞ごとの音声を表出した割合より、音声の表出は、歌詞によって動作が大きく異なる部分で反応しにくく、「タタタターン」「トトトトーン」などのリズムの構成において20%程度となった。

2 動作の種類と音声及び動作の表出

図2に、動作の種類と対象児の音声及び動作を表出した割合を示した。図2より、動作のみの表出が多かった動作の種類は、C6を除いて足踏み動作であり、表出した割合の平均は63%であった。また、音声と動作を合わせた表出は、C2、C6において両手で太ももを叩く動作でみられ、C4、C5、C7においては両手を叩くなどの動作でわずかにみられた。

3 歌詞の種類と音声及び動作の表出

図3に、歌詞の種類と対象児の音声及び動作を表出した割合を示した。図3より、動作のみの表出が多かった歌詞の種類は、動詞、擬音であり、表出した割合の平均は動詞で40%、擬音で43%であった。また、音声と動作を合わせて表出した割合の平均は、名詞と動詞で15%、擬音で13%であった。

4 リズムの構成と音声及び動作の表出

図4に、リズムの構成と対象児の音声及び動作を表出した割合を示した。図4より、動作のみの表出が多かったリズムの構成は、C1、C7を除いて、符点音符を含むリズムであり、表出した割合の平均は46%であった。また、音声と動作を合わせた表出は、C1、C3を除いて、八分音符を含むリズムの構成でみられ、表出した割合の平均は23%であった。

5 音声と動作の表出の統合

歌遊びにおける音声と動作の統合は、3つの段階がみられた。まず、動作を中心とした表出の段階であり、C1、C3、C4の3名が該当した。また、C3は動作の順序を覚えて発信できる段階、C4は音声の表出もわずかにみられる段階であった。次に、動作の表出を中心としつつも、音声のみの表出や音声と動作を合わせた表出がみられる段階

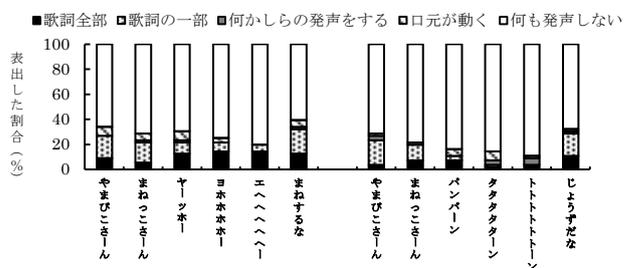


図1 「山びこごっこ」全児童における歌詞ごとの音声を表出した割合

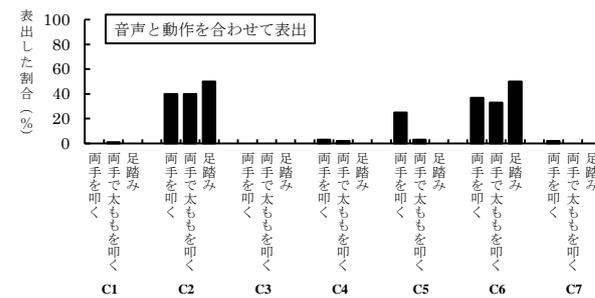
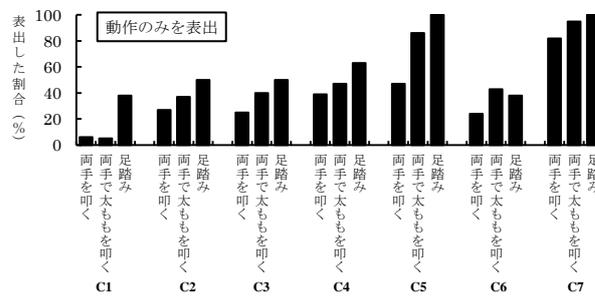


図2 動作の種類と対象児ごとの音声及び動作の表出

であり、C2、C5、C7の3名が該当した。さらに、安定した音声と動作を統合した表出の段階として、C6が該当した。

図5に、C2の「山びごっこ」における音声及び動作の表出をセッションごとに示した。セッションの前半は、動作を中心とした表出がみられ、10セッションからは、音声のみの表出と動作のみの表出が交互に出現した。さらに14セッション以降、動作のみの表出と音声のみの表出が低下し、音声と動作を合わせた表出が安定してみられた。

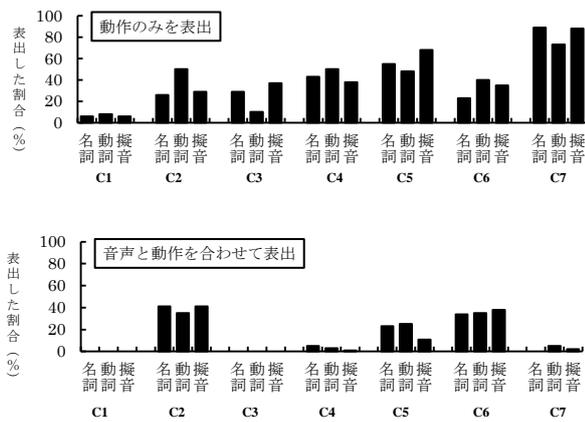


図3 歌詞の種類と対象児ごとの音声及び動作の表出

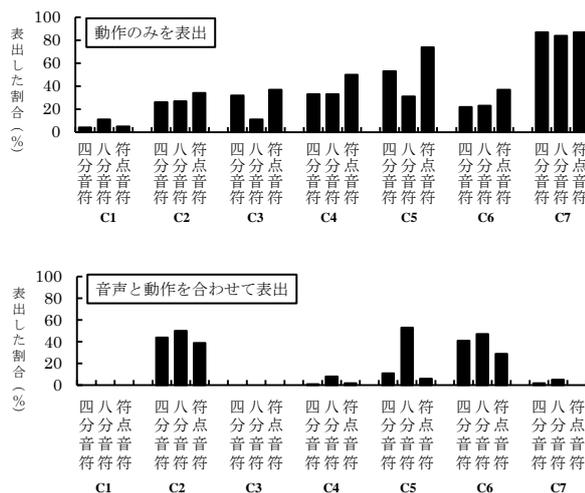


図4 リズムの構成と対象児ごとの音声及び動作の表出

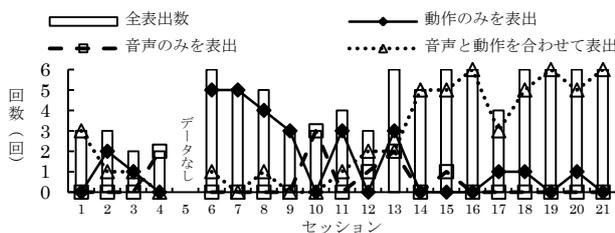


図5 C2「山びごっこ」セッションごとの音声及び動作の表出と総数

6 音声及び動作を促す教師のかかわり

教師のかかわりは、音声や動作をとまなうかかわり、肩を叩くなどの身体接触、「次は足だよ」という声かけなど、様々であった。

また、児童の音声及び動作を促したかかわりとしては、①動作をする部位に触る、②児童を見ながらモデルや動作を行う、③声かけをしながら動作を提示する、④歌いながら動作をする部位に触るなどがみられた。

V 考察

1 楽曲における音声及び動作の表出

動作の表出においては、楽曲による明確な違いが示されなかった。また、音声の表出においても、楽曲による明確な違いはみられなかったが、歌詞によって動作が大きく異なる楽曲には反応しにくく、表出が少なかったことから、動作の種類やリズム構成によって影響を受ける可能性が示唆された。このことから、曲全体の構成を捉えて反応しているのではなく、歌詞や動作の一部分など、反応しやすい要素において表出していると考えられる。

2 歌遊びの要素にもとづく音声及び動作の表出

歌詞の種類については、動詞、擬音の歌詞において動作の表出が認められる傾向にあった。知的障害児は、親しんでいる曲や擬音の入った曲、歌詞と動作が一致した曲は、手拍子で合わせやすいとされる(齋藤, 2008)。また、幼児においては、擬音語に対する感受性の高さも指摘されており(遠矢, 1997)、このようなことから、擬音での動作の表出が多かったと考えられる。

また、動詞の歌詞においては、日常生活で耳にしたことがあると考えられる「はねて」「くっついた」などの言葉を含んでいたことが、表出に影響を与えた可能性がある。菅井・佐藤・久保山(1998)は、日常的な言語や動作は、自分の頭に記憶している音声言語や動作の概念と対応させやすいと述べており、日常的に使用する言葉は、視覚的な動きのイメージがもちやすく、動作と対応させやすかったといえる。しかし、音声の表出については、歌詞の種類による明確な違いが認められず、動作

の種類やリズムの構成などの要因が、相互に作用し合っていると推察された。

次に、リズムの構成について、八分音符を含むリズムの構成では、音声及び動作を合わせた表出が、符点音符を含むリズムの構成では、動作のみの表出が認められる傾向にあった。幼少の子どもは、ゆっくりとした四分音符のリズムの中に速いテンポが入ることで注意を向けやすくなる場合がある(古市, 1971)。本研究の楽曲にも、四分音符を含むリズムの後に、八分音符や符点音符の速いテンポが現れるフレーズがあり、リズムの変化を感じとりやすかったものと推察される。また、C2、C5、C6においては、音声と動作を合わせた表出がみられ、久保山(1992)が指摘しているように、動作の確立にともなって歌う行動もできるようなると考えることができる。

一方、符点を含んだリズムにおける音声の表出は、八分音符における音声の表出に比して少なかった。知的障害児は、歌唱の中で休符や符点音符などのリズムへの対応に困難さがあるとされ、これは森・池田・一門(1997)の報告と一致した。

最後に、動作の種類については、足踏みで動作の表出が多くみられた。宇佐川(2007)は、獲得させやすい身体模倣の一つに、日常的に習得されている動作を挙げている。足踏みは、歩行の動きに類似しており、表出しやすかったと考えられる。

以上のことから、楽曲に含まれる要素の違いが、音声や動作の表出に影響を与える可能性が推察され、楽曲選択の際にも、これらを踏まえることが重要であろう。例えば、歌遊びの中で歌唱することに重点をおく場合は、複雑な動作が少なく、動詞や擬音語・擬態語の歌詞が含まれる楽曲、他者の動きを見て模倣することに重点をおく場合は、日常的に行う多様な動作で構成され、リズムの変化を感じられる楽曲を取り入れることなどである。

3 歌遊びにおける音声及び動作の統合段階

対象児の音声と動作の表出は、楽曲を問わず、動作を中心とした表出にはじまり、次第に音声のみの表出や楽曲の一部における音声と動作を統合した表出が現れ、安定した音声と動作を統合した

表出に至る段階が考えられた。これは、久保山・菅井(1993)や菅井(1994)の報告と一致する。つまり、異なる楽曲を用いた場合においても「聴覚→構音系の情報処理」に「動作系の情報処理」が先行する段階が認められた。

4 児童の音楽活動を促す教師のかかわり

歌遊び場面における教師のかかわりとしては、動作部位に触ることやモデルを示すことが有効と考えられる。また久保山(1997)が、動作系への着目とその発信をスムーズにする状況づくりの重要性を強調していることから、歌遊びのイメージが形成されやすいようなかかわりが求められよう。しかし、これらの支援は必ずしも児童の音声や動作の表出を促すとは限らない。児童との信頼関係の形成を基盤に、音楽活動にともなう児童の変化を細かく見取り、改善し続けることが重要といえる。

文献

- 遠藤晶(1998) 幼児の手あそびにおけるパフォーマンスの年齢による変化. 発達心理学研究, 9, 25-34.
- 古市久子(1971) rhythm 反応における発達の研究の検討と実験. 音楽学, 17, 94-106.
- 角藤智津子(1985) 幼児期の音楽教育と手あそび. 清和女子短期大学紀要, 14, 17-24.
- 小宮勝(1970) 精薄児の身体調整力に関する研究. 特殊教育学研究, 8, 51-62.
- 久保山茂樹(1992) 発達遅滞児における音声言語行動の成立—歌遊びからのアプローチ—. 特殊教育学研究, 29, 33-37.
- 久保山茂樹(1997) 発達遅滞児の歌遊びにおける音声と動作との関連. 国立特殊総合研究所研究紀要, 24, 73-79.
- 久保山茂樹・菅井邦明(1993) 歌遊びのコミュニケーション場面における発達遅滞児の音声言語行動の諸相. 特殊教育学研究, 31, 13-22.
- 松井和紀(1980) 音楽療法の手引—音楽療法家のための—. 牧野出版.
- 文部科学省(2009) 特別支援学校学習指導要領解説総則等編(幼稚園・小学部・中学部).
- 文部科学省(2011) おんがく☆ おんがく☆☆ おんがく☆☆☆教科書解説. 東京書籍.
- 森恭子・池田祥子・一門恵子(1987) 精神遅滞児の歌唱能力の特性について. 熊本大学教育学部紀要, 46, 59-64.
- 南雲直二・松野豊(1982) 精神薄弱児の歩行の定量的評価とその特徴. 特殊教育学研究, 20, 17-26.
- 齋藤一雄(1996) 精神遅滞児のリズムパターンへの同期と再生—視覚的提示とことばを添えて—. 特殊教育学研究, 33, 15-22.
- 齋藤一雄(2008) 知的障害児における歌唱教材によるリズム同期の分析. 学校音楽研究, 12, 174-183.
- 齋藤一雄・星名信昭・斉藤義夫(1989) 精神遅滞児における異なるテンポへの同期の発達. 特殊教育学研究, 27, 1-9.
- 菅井邦明・佐藤紘昭・久保山茂樹(1998) 音楽活動による障害児の言語行動形成の条件. 特殊教育学研究, 35, 1-7.
- 菅井邦明(1994) 初期音声言語行動の評価法(試案2)—歌遊び「げんこつ山のためきさん」を利用して—. 東北大学教育学部研究年報, 42, 97-128.
- 遠矢浩一(1997) 幼児の歌遊び場面におけることばと動作の関連性について. 日本教育心理学会総会発表論文集, 39, 87.
- 梅本堯夫(1987) 認知科学選書6 認知とパフォーマンス. 東京大学出版会.
- 宇佐川浩(2007) 障害児の発達臨床 I 感覚と運動の高次化からみた子ども理解. 学苑社.